

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

No.31 [2006 / 2007 No.2]

contents

page

日本サンゴ礁学会第9大会公開シンポジウム
および特別セッションのご案内 2-5

It's Time to Fly! 6

オーストラリアサンゴ礁学会
第82回大会 <参加報告> 7

国際サンゴ礁学会ヨーロッパ大会
<参加報告> 7

連載1:若手会員の眼 -26- 8

連載2:サンゴ礁関連施設探訪 -15- 8
[京都大学フィールド科学教育センター 瀬戸臨海実験所]

【会告】

2006年度総会の開催について

日本サンゴ礁学会2006年度総会を、右記の通り開催いたします。
会員の皆様は、ご出席下さい。

なお、総会に出席できない方は、本ニュースレターに同封いたしました
委任状にご記名・捺印の上、郵送またはファックスにて事務局
まで11月20日(月)までお送りくださるか、出席する会員に託して当
日事務局の手元に届くようにして下さいようお願いいたします。

日本サンゴ礁学会会長 小西 健二

- 日 時:2006年11月25日(土) 17時30分~18時30分
- 場 所:齊藤報恩会自然史博物館
- 議事(案):2005/2006年度会計報告, 2006/2007年度予算計画
各委員会報告, 活動計画など

<事務局>

茅根 創
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
FAX: 03-3814-6358



第9回大会 公開シンポジウム

および 特別セッション ..のご案内

2006年11月24日(金)～26日(日)

齊藤報恩会自然史博物館 (仙台市)
大会情報 日本サンゴ礁学会: <http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>

日本サンゴ礁学会第9回大会を2006年11月24日(金)～26日(日)に開催いたします。

今大会では、個人発表以外にもシンポジウムと特別セッションが開催されます。皆様のお越しをお待ちしております。

第9回大会実行委員長 中森 亨

スケジュール

11月24日(金曜日)

- 9:00 開場、大会及びPCデータ受付開始
- 9:15 ポスター発表開始
- 11:00 ポスター発表終了
- 11:00-12:00 口頭発表(一人15分質疑応答込み)
- 12:00-13:00 昼食
- 12:00-14:00 サテライト会議(鹿熊信一郎)
- 13:00-17:30 口頭発表(一人15分質疑応答込み)
- 17:30-19:30 特別セッション

11月25日(土曜日)

- 9:00 開場、PCデータ受付開始
- 9:15 ポスター発表開始
- 11:00 ポスター発表終了
- 11:00-12:00 口頭発表(一人15分質疑応答込み)
- 12:00-13:00 昼食
- 12:00-13:00 ミニシンポジウム(渋谷拓郎)
- 13:00-17:30 口頭発表(一人15分質疑応答込み)
- 17:30-18:30 総会
- 19:00-21:00 懇親会およびポスター賞発表

11月26日(日曜日)

- 10:00 公開シンポジウム(高橋達郎)
- 10:30 公開シンポジウム(菅 浩伸)
- 11:00 公開シンポジウム(井龍康文)
- 11:45-12:00 公開シンポジウム(質疑応答)
- 12:00-13:00 昼食
- 13:00-16:00 公開シンポジウム(COE企画)

会場への交通

会場である齊藤報恩会自然史博物館はホテル仙台プラザと同じ敷地内にあります。

○ 仙台駅から会場まで

- ・タクシーを利用した場合、5分程度で到着します。代金は690円です。
- ・仙台市営地下鉄南北線を利用した場合、仙台駅で乗車し勾当台公園駅で下車してください。その後5分程度歩くと会場に到着します。

○ 仙台空港から仙台駅まで(約40分)

仙台駅前行きエアポートリムジンバスに乗り込んでください。駅前で下車し、地下鉄に乗り換えてください。

○ 齊藤報恩会館へのご案内図



公開シンポジウム

【午前のプログラム】

「日本のサンゴ礁掘削 — 解き明かされるサンゴ礁の謎 —」

- 10:00-10:30 高橋達郎 「サンゴ礁はどのように成長してきたか—久米島の完新世ボーリングから(仮)」
- 10:30-11:00 菅 浩伸 「サンゴ礁環境はどのように成立してきたか—ボーリングで明らかになった完新世の海面変化とサンゴ礁形成」
- 11:00-11:45 井龍康文 「70年前に掘られたボーリング試料が語る北大東島の2,500万年間の歩み」

【午後のプログラム】

「海洋島および海上の炭酸塩岩の堆積・続成過程に関するシンポジウム」【使用言語: 英語(同時通訳はありません)】

- 13:00-13:05 Opening remarks
- 13:05-13:45 Keynote address (Budd, D., Univ. Colorado)
- 13:45-14:15 History of reef drilling (Konishi, K., Kanazawa Univ.)
- 14:15-14:45 Holocene reefs (Kan, H., Okayama Univ.)
- 14:45-15:00 Coffee Break and Poster Presentation; 'Carbonate deposits on submerged seamounts in northwestern Pacific' (Takayanagi, H., Tohoku Univ.)
- 15:00-15:30 25-million-year history of Kita-daito-jima Atoll, northern Philippine Sea. (Iryu, Y., Tohoku Univ.)
- 15:30-15:55 Atoll deposits as an archive of tectonic movements (TBD)
- 15:55-16:00 Closing remarks

特別セッション

【プログラム】司会: 日高道雄

「分子・生態から見たイシサンゴ類の分類と進化-研究の現状と展望」

- 17:00-17:05 日高道雄 背景と趣旨の紹介
- 17:05-17:35 深見裕伸 「高次分類群に対する分子系統解析 -形態分類の見直しへ」
- 17:35-18:05 林原 毅 「形態類似種の分類への生態学的知見の応用 -生殖隔離の観点から」
- 18:05-18:35 服田昌之 「進化という動的な認識」
- 18:35-19:00 パネル討論 「サンゴにおける“種”の認識と分類研究の方向性」

大会 PROGRAM プログラム

口頭発表

11月24日(金)

講演番号	講演時間	タイトル	発表者氏名
1-1	11:00	塊状ハマサンゴについての歯形-かじった犯人はだれか?	○桑村哲生 (中京大・教養)
1-2	11:15	Picophytoplankton at the coral reef of Sezoko Island	○ Beatriz E. CASARETO (LASC)・Y. SUZUKI (Shizuoka University)・L. CHARPY (IRD-France)・Y. SHINOMURA (Shizuoka University)・Y. ISHIKAWA (Institute of Environmental Science)・Y. SHIOI (Shizuoka University)・Y. NAKANO (Ryukyu University, Sezoko)・H. FUJIMURA (Ryukyu University)
1-3	11:30	海洋博公園地先におけるヤギ類(花虫綱・八放サンゴ亜綱)の分布	○野中正法(沖縄美ら海水族館)・藤原秀一(いであ株式会社)
1-4	11:45	沖縄瀬底島のサンゴに群がる多様なバクテリア <SSU 遺伝子構造による解析>	○吉永光一・Casareto Beatriz・鈴木 款(静岡大)・伊藤卓司・ジュリーロジャー(三菱商事)
	12:00	昼食	
1-5	13:00	サンゴ礁における動物プランクトンの日周変動	○中嶋亮太(創価大・工)・吉田輝明・BHR Othman・戸田龍樹
1-6	13:15	マレーシア・ティオマン島における Ostracoda のブルームについて	○戸田龍樹(創価大・工)・R. Omar・中嶋亮太・吉田輝明・B. H. R. Othman
1-7	13:30	サンゴ礁池におけるリュウキスガモと造礁サンゴの相対的2種共存機構の解明にむけて	○二宮早由子(東京久栄)・井上隆彦(東京久栄)・中野義勝(琉球大・熱帯生物園)・矢野優佳(琉球大・院理工)・Preetika Singh(琉球大・院理工)・土屋 誠(琉球大・理)
1-8	13:45	砂供給者としてみた大型有孔虫の棲息環境	○藤田和彦(琉球大・理・物質地球)・綿貫 啓((株)アルファ水工コンサルタンツ)・青田 徹((株)不動テトラ)・柴田早苗((株)不動テトラ)・岩尾研二(阿嘉島臨海研究所)・福島朋彦(海洋政策研究財団)
1-9	14:00	サンゴ幼生に作用する無節サンゴモの他感作用物質	○北村 誠(名大・院理)・小山智之(海洋大・海洋科学技術)・中野義勝(琉大・熱生研)・上村大輔(名大・院理)
	14:15	休憩	
1-10	14:30	<i>Acropora digitifera</i> における群体成長の季節変動:PAM クロロフィル蛍光測定法による長期光合成モニタリング	○中村 崇・山崎征太郎・山崎秀雄(琉球大)
1-11	14:45	サンゴの褐虫藻組成とストレス耐性の季節変化に関する生理学的研究	○諏訪諒太・廣瀬慎美子・日高道雄(琉球大・理)
1-12	15:00	微生物食物連鎖の増殖基質としてのサンゴ粘液の役割	○的場洋右(高知大・院農)・深見公雄(高知大・院黒潮圏海洋科学)・Keshavmurthy Shashank(高知大・院黒潮圏海洋科学)
1-13	15:15	日本国内のオニヒトデ個体群は遺伝的に混ざっているか?	○安田仁奈(東工大)・長井 敏(瀬戸内水研)・浜口昌巳(瀬戸内水研)・灘岡和夫(東京工大)
1-14	15:30	フトエダミドリイシ集団の遺伝的構造	○磯村尚子(琉球大・院・理工)・日高道雄(琉球大・理・海洋自然)
1-15	15:45	マイクロサテライト DNA マーカーによるアザミサンゴの集団構造の解析	○鈴木悠太・武島弘彦・早川英毅(東大・海洋研)・安部真理子・日高道雄(琉球大・理工)・西田 睦・渡邊俊樹(東大・海洋研)
1-16	16:00	富栄養化がサンゴ群体の光合成と石灰化のバランスに与える影響	○田中泰章(東大・海洋研)・宮島利宏(東大・海洋研)・小池勲夫(東大・海洋研)・小川浩史(東大・海洋研)・林原 毅(西海区水研・石垣)
1-17	16:15	Role of Dissolved Organic Matter in Coral Reef	○Y. SUZUKI (Shizuoka University)・Beatriz E. CASARETO (LASC)・L. CHARPY (IRD-France)・Y. SHINOMURA (Shizuoka University)・Y. ISHIKAWA (Institute of Environmental Research), Y. NAKANO (Ryukyu University, Sezoko)・H. FUJIMURA, (Ryukyu University)・T. Julie Roger Itou (Mitsubishi Corporation)
1-18	16:30	除草剤および船底塗料によるサンゴ礁域汚染の潜在リスク	○安村茂樹(WWF ジャパン)・宮城俊彦(沖縄県衛生環境研究所)・岡村秀雄(神戸大)・渡辺俊樹(東大)
1-19	16:45	那覇港外郭施設におけるサンゴの生育に適した流動環境について	島谷 学・○佐貫 宏・中瀬浩太(五洋建設(株))・江里口岳志((株)あさひ)・岡安章夫(東京海洋大)
1-20	17:00	日本の亜熱帯海域における海草藻場等の閲覧システムの構築	○伊東永徳・宮本和治((株)サイエンスアンドテクノロジー)・大谷謙仁・加藤 健・根岸明・野崎 健・山室真澄((独)産業技術総合研究所)
1-21	17:15	飼育下トゲスギミドリイシから産まれた胚・幼生の健康状態	○大久保奈彌(東京工業大)・山本広美・仲矢史雄・岡地賢

11月25日(土)

講演番号	講演時間	タイトル	発表者氏名
2-1	11:00	沖縄県のサンゴ礁海域における栄養塩特性とアオサの関係について	○金城孝一・大城洋平(沖縄県衛生環境研)・比嘉榮三郎(沖縄県県民生活センター)・灘岡和夫(東京工業大)
2-2	11:15	サンゴ群生海域における渦鞭毛藻殺滅細菌の分布とサンゴ白化に対するその影響	○深見公雄・中尾給津子・Keshavmurthy Shashank・的場洋右(高知大・院・黒潮圏海洋科学)
2-3	11:30	養殖サンゴの植え付けによるサンゴ礁生態系再生への取り組み	○山里祥二・成田隆一・杉野守司(NPO 法人 コーラル沖縄)
2-4	11:45	モニタリングサイト1000サンゴ礁調査(平成15~17年度)のとりまとめ成果について	木村匡((財)自然環境研究センター)・○阪口法明(環境省)・岸田宗範・黒川武雄
	12:00	昼食	
2-5	13:00	沖縄島サンゴ礁池の自然基盤に移植したサンゴ片の生存と成長	○西平守孝(名桜大・総合研究所)
2-6	13:15	1998年以降の石西礁湖でのサンゴの白化状況	○野島 哲・岡本峰雄・上野光弘(九州大・院理)
2-7	13:30	ジャコガイ殻の日輪構造と同位体比・微量元素の分布	○渡邊 剛(北大・院理)・Meibom Anders(スタンフォード大)・白井厚太郎(東大・海洋研)・Cuif Jean-Pierre(パリ大)・横山一巳(科博)・中森 亨(東北大・院理)・佐野有司(東大・海洋研)
2-8	13:45	沖ノ島島卓礁の完新世における形成過程	○茅根 創・阿部修平・本郷宙軌(東大・理)・福島朋彦(海洋政策研究(財))・利根川誠(国交省・京浜河川事務所)
2-9	14:00	サンゴ礁海域における科学魚探を用いた底質分布の評価	○古島靖夫(JAMSTEC)・鈴木貞男(O.R.E.)・山本啓之(JAMSTEC)・丸山正(JAMSTEC)
2-10	14:15	海図水路誌などにみるサンゴ礁分類と表現法	○目崎茂和(南山大)・渡久地 健(沖縄協会嘱託)
	14:30	休憩	
2-11	14:45	沖縄県久米島で作成されたサンゴ礁地形断面図の情報量とL関数を用いた情報論的解析	○中森 亨(東北大・院理)・菅 浩伸(岡山大・教育)・中村隆志(東北大・院理)
2-12	15:00	Responses of Pleistocene coral communities to sea-level changes in the Ryukyu Islands	○ハンブレ マーク アンドレ・井龍康文(東北大・院)
2-13	15:15	阿嘉島周辺海域におけるさんご礁の社会・経済的価値	○田村 實(阿嘉島臨海研究所)

2-14	15:30	石西礁湖自然再生事業—その経緯と課題	○野村 環 (環境省那覇自然環境事務所石垣自然保護官事務所)
2-15	15:45	石西礁湖におけるサンゴ幼生着床具を用いたサンゴ群集の再生	○藤原秀一 (いであ株式会社)
2-16	16:00	石西礁湖におけるコミュニティベース MPA の設定にむけて	○鹿熊信一郎 (亜熱帯総合研究所)
2-17	16:15	石西礁湖における漁業者・ダイビング事業者などの利用実態と管理への期待	○中谷誠治 (亜熱帯総合研究所)
2-18	16:30	聞き取り調査に基づくサンゴ礁生態系環境負荷に関わる社会構造の変遷についての考察	○熊谷 航・瀧岡和夫・松浦慎平 (東京工業大・情報理工・情報環境学)
2-19	16:45	慶良間海域保全連合会によるサンゴ礁保護活動 (1) サンゴ移植によるサンゴ礁生態系の再生支援活動	○森山 敦・入川暁之 (慶良間海域保全連合会)
2-20	17:00	慶良間海域保全連合会によるオニヒトデ対策の効果	○阿武靖士・入川暁之 (慶良間海域保全連合会)
2-21	17:15	慶良間海域保全連合会によるデジタルミュージアム活動の報告	○国吉晴大・入川暁之 (慶良間海域保全連合会)
2-22	17:30	沖ノ鳥島のサンゴの種苗生産と増殖計画	○三上信雄・安藤 亘・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)

ポスター発表

11月24日(金) 9:15 ~ 11:00

講演番号	タイトル	発表者氏名
P-1	群体サイズと群体年齢が群体性サンゴの成長や繁殖に及ぼす影響	○甲斐清香 (琉球大・院・理工)・酒井一彦 (琉球大・熱生研)
P-2	イシサンゴを宿主とするカイアシ類について	○山城秀之 (沖高専・生資源)・Kim, Ill-Hoi(Kangnung Nat. Uni.)
P-3	石垣島とタヒチ島の礁斜面における造礁サンゴの垂直分布の違い	○杉原 薫 (福岡大・理)・山田 努 (東北大・院理)・中森 亨 (東北大・院理)・井龍康文 (東北大・院理)
P-4	四国西南海域における造礁サンゴの分布と幼生加入—2005	○宮本麻衣 (東海大・院)
P-5	サンゴに生育する藻類の多様性	○太期一弘 (静岡大・理・生物地球)・中野義勝 (琉球大・熱帯生物)・藤村弘行 (琉球大・理・海洋自然)・石川義朗 (静岡大・理工研・環境科学)・Beatriz E. Casareto (静岡大・遺伝子研究施設)・鈴木 款 (静岡大・院・自然科学)・塩井祐三 (静岡大・院・自然科学)
P-6	共生時における褐虫藻 <i>Symbiodinium</i> の微細形態：自由生活状態との比較	○山下 洋・小池一彦 (北里大・水)・岩井憲司 (沖縄水産海洋セ)・緒方武比古 (北里大・水)
P-7	沖繩島西海岸におけるトゲサンゴ (<i>Seriatopora hystrix</i>) 個体群	○長田智史 ((財) 沖縄県環境科学センター)・山川英治・小笠原敬・小澤宏之
P-8	人工基盤上でのサンゴ着生に影響を及ぼす生物群	○山本克則 (鹿島技術研)・岩尾研二 (阿嘉島臨海研)・大葉英雄 (東京海洋大)・馬場将輔 (海洋生物環境研)
P-9	石垣島白保サンゴ礁におけるサンゴならびに生物群集の変遷とその要因について	○前川 聡 ((財) WWF ジャパン)・佐藤 哲 (長野大・産業社会)・安村茂樹 ((財) WWF ジャパン)・荒井 寛 (井の頭自然文化園)・天野未知 (東京都葛西臨海水族園)・鈴木倫太郎 (駒澤大・応用地理研)・持田裕子 (コーラル・ネットワーク)・鈴木智子 ((財) WWF ジャパン)
P-10	有孔虫とその生育基盤としての芝草状藻類—フィールド観察と飼育実験—	○井手陽一 (海洋プランニング (株))・茅根 創 (東大・理)
P-11	サンゴ幼生と付着生物群集の着生空間をめぐる競争について	○前川 剛 (創価大)・戸田達樹 (創価大)・B. A. A. Kee Alfian (Universiti Kebangsaan Malaysia)・M.R.M. Kushairi (Universiti Industri Selangor)・B. H. R. Othman (Universiti Kebangsaan Malaysia)
P-12	西表島浦内湾におけるサラサバテイ <i>Trochus niloticus</i> の生態分布	○佐藤 守 (東海大・海洋・院)・河野裕美 (東海大・海洋研)・上野信平 (東海大・海洋)
P-13	ガンガゼの摂食に対するエダミドリイシの保護	○岸本太郎 (東海大・海洋・院)・権田泰之 (木曾興業 (株))・松永育之 ((株) 東海アクアノート)・上野信平 (東海大・海洋)
P-14	マジュロ環礁における大型底生有孔虫の生息を規定する地理・地形・底質・水質条件	○大澤葉子 (東大・院理)・藤田和彦 (琉球大・理)・井手陽一 (海洋プランニング)・茅根 創 (東大・院理)
P-15	ライフフォーム別にみたサンゴ個体の伸長とサンゴ群集の成長	○淵之上優美 (創価大)・岡下智子 (創価大)・SP Kok (創価大)・前川 剛 (創価大)・中嶋亮太 (創価大)・M. R. M. Kushairi (Universiti Industri Selangor)・B. H. R. Othman (Universiti Kebangsaan Malaysia)・戸田龍樹 (創価大)・寺崎 誠 (東大)
P-16	礁池においてリュウキュウスガモと共存するエダコモンサンゴの利益について	○中野義勝 (琉大・熱生研)・二宮早由子 (東京久栄)・土屋 誠 (琉大・理)
P-17	沖ノ鳥島の礁池内に生息する造礁サンゴ類の産卵期と石灰生産量の推定	○岡地 賢 ((有) コーラルクエスト)・井手陽一・石橋大輔・利根川 誠
P-18	沖ノ鳥島のサンゴの広域調査	○北野倫生・山本秀一 (エコー)・三上信雄・安藤 亘 (水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)
P-19	CCMP2467 株を用いた刺胞動物—褐虫藻モデル共生系の確立と応用	○宇都宮嘉宏 (東大・海洋研)・紀井晋一・田中次郎 (東京海洋大)・安村茂樹 (WWF ジャパン)・湯山育子・渡辺俊樹 (東大・海洋研)
P-20	水族館における、トゲギミドリイシの産卵についての研究	○山本広美・柿崎智広・野中正法 ((財) 沖縄美ら海水族館)
P-21	アザミサンゴの異なるタイプ間の交配実験の結果について	○安部真理子 (琉球大・理工)・早川英毅・渡辺俊樹 (東大・海洋研)・日高道雄 (琉球大・理工)
P-22	船上で採卵した沖ノ鳥島産 <i>A. tenuis</i> の種苗生産	○青田 徹 (不動テトラ)・綿貫 啓 (アルファ水工コンサルタンツ)・三上信雄・中村良太・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)
P-23	高緯度サンゴ群集の放卵放精パターン	○野澤洋耕 ((財) 黒潮生物研究所)
P-24	高水温下で過酸化水素が <i>Galaxea fascicularis</i> の代謝に及ぼす影響	○樋口富彦・藤村弘行・新垣雄光・大森 保 (琉球大・院理工学・海洋環境学)
P-25	電気を用いたサンゴの成長実験	○岩瀬晃啓 (琉球大・理工)・佐藤崇範・平良栄康 ((株) Aqua Culture Okinawa)
P-26	硝酸態窒素によって誘導される褐虫藻の運動性	○神木隆行・山崎秀雄 (琉球大・院)
P-27	2006 年高知県大月町西泊における造礁サンゴの産卵状況と、 <i>Acropora solitariaensis</i> 2 形態の生殖の特徴	○目崎拓真 (東北大・院理)・岩瀬文人 (黒潮生物研究所)・中地シュウ (黒潮生物研究所)・野沢洋耕 (黒潮生物研究所)・宮本舞衣 (東海大)
P-28	ミドリイシの幼生の着生場所の選択について	○岩瀬文人 (黒潮生物研究所)
P-29	Molecular characterization of the zoanthid genus <i>Isaurus</i>	○James Davis Reimer・Shusuke Ono・Fumihito Iwase
P-30	環境中の褐虫藻細胞数定量方法の開発：リアルタイム PCR 法の確立と応用	○大内 歩・小池一彦 (北里大・水)・玉城泉也・林原 毅 (西海水研・石垣)
P-31	沖繩産ザルガイに共生する褐虫藻の遺伝的多様性の解析	○紀井晋一 (東京海洋大)・中谷将典 (東大・海洋)・矢数彩子・山口正士 (琉球大)・田中次郎 (東京海洋大)・西田 睦・渡辺俊樹 (東大・海洋研)
P-32	水槽内におけるサンゴ種苗生産の試み	○中村良太・三上信雄・安藤 亘・石岡昇 (水産土木建設技術センター)・綿貫 啓 (アルファ水工コンサルタンツ)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)

P-33	可視・近赤外線によるサンゴの活性モニタリング手法の開発	○齊藤 宏 (東京海洋大学)・岸野元彰 (海洋大・海洋科学)・石丸 隆 (海洋大・海洋科学)・瀬岡和夫 (東工大・大学院情報理工学研究所)・工藤 栄 (国立極地研究所)
P-34	駿河湾江梨地先におけるエダミドリイシの生息状況と再生方法に関する研究	○別所 学 (東海大・院)・舟尾 隆 (東海大・海洋科学博物館)・横地洋之 (東海大・海洋研)
11月25日(土) 9:15 ~ 11:00		
講演番号	タイトル	発表者氏名
P-35	藻食性魚類と栄養塩が小サンゴ群体の生存成長に及ぼす影響	○玉井玲子 (琉球大・院・海洋自然)・酒井一彦 (琉球大・瀬底実験所)
P-36	Analysis of Nutrient, Algal and Other Related Measurements for Shiraho Reef Area and Todoroki River: Implications for Monitoring and Modelling of Watershed-Reef Connectivity	○Ariel C. Blanco・瀬岡和夫・山本高大・西本拓馬・竹本直人・有坂和真・松浦慎平 (東京工業大・院情報理工)
P-37	気象擾乱のもとでの石垣島東海岸サンゴ礁海域の水環境変動特性について	○山本高大・瀬岡和夫・西本拓馬・Ariel.C.Blanco (東京工業大・院情報理工)・石丸 隆 (東京海洋大・海洋科学・海洋環境)・有坂和真 (東京工業大・院情報理工)・田村 仁 ((独)海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター)
P-38	港湾におけるサンゴ群集生育状況評価へのハビタット適正指数(HSI)モデル適用の試み	○竹田 哲・前川 進・比嘉静秀・仲村進一・平山千尋 (沖縄総合事務局開発建設部港湾計画課)・古川恵太・五十嵐学 (国土交通省国土技術政策総合研究所)・池田義紀・長倉敏郎 (港湾空間高度化環境研究センター)・高尾敏幸・山本秀一 ((株) エコー沿岸環境部)
P-39	慶良間諸島久場島・屋嘉比島周辺でみられる白化被害からの回復の兆し	○谷口洋基 (阿嘉島臨海研究所)
P-40	河川流入が塊状ハマサンゴに及ぼす影響	○森本直子 (琉球大・理工)・酒井一彦 (琉球大・熱生研)
P-41	石垣島白保サンゴ礁内における生産量の測定	○中村隆志・中森 亨 (東北大・院理)
P-42	高濃度 CO ₂ 条件下における炭酸カルシウムの溶解速度測定	山本将史 (東京大・院理・地球惑星科学専攻。現在、日本製粉(株))・○渡邊 敦 (名古屋・院・環境学研究所)・茅根 創 (東京大・院理・地球惑星科学専攻)・野崎 健 (産業技術総合研究所)・加藤 健 (産業技術総合研究所) 根岸 明 (産業技術総合研究所)
P-43	黒島の沿岸海域及び地下水の水質について	○岩崎誠二・佐藤晴香・亀田和成・若月元樹
P-44	サンゴ・海草混成群落における基礎生産量の比較	○石川義明 (環境科技研)・鈴木 款 (静岡大)・ベアトリス E カサレト (LASC)・藤村弘行 (琉球大)・中野義勝 (琉球大)・篠村理子 (静岡大)・黒沢勝彦 (LASC)・本宮信夫 (海海)・川満 悟 (LASC)
P-45	Niue 島産の化石 <i>Porites</i> の炭素・酸素同位体比記録	○山田 努 (東北大・院理・地圏進化学)・浅海竜司 (東北大・院理・地球環境物理学)・井龍康文 (東北大・院理・地圏進化学)・Gustav Paulay (Department of Zoology, University of Florida)
P-46	Ammonium uptake kinetics of crustose coralline algae	○Yeong-Shyan Yuen・Takashi Nakamura・Hideo Yamasaki (琉球大・院理工)
P-47	シャコガイ殻を用いた高分解能の環境解析に適した殻の大きさと年齢	○服部忠嵩 (東北大・理)・山田 努 (東北大・院理)・岩井憲司 (沖縄県水産海洋研究センター 石垣支所)
P-48	過去数百年間の古海洋環境―巨大サンゴの骨格記録からの復元―	○浅海竜司・山田 努・井龍康文・花輪公雄 (東北大・院理)
P-49	沖ノ鳥島のサンゴ年輪解析による古環境復元	○阿部修平・茅根 創・中村修子・飯嶋寛子 (東大・院理・地球惑星)
P-50	ケニアのサンゴ年輪による過去 50 年間のインド洋ダイポールモードの復元	○中村修子・茅根 創・飯嶋寛子 (東大・院理・地球惑星)・Timothy R. McClanahan (Marine Programs, Wildlife Conservation Society, USA.)・Swadhin Behera (海洋研究開発機構)・山形 俊男 (東大・院理・地球惑星)
P-51	サンゴ礁におけるアミノ酸の組成と変動	○篠村理子 (静岡大)・鈴木 款 (静岡大)・ベアトリス カサレト (LASC)・中野義勝 (琉球大)・伊藤卓司 (三菱商事)
P-52	G I S でみた瀬底島北西部サンゴ礁生態系の空間構造	○中井達郎 (国士舘大)・中野義勝 (琉球大)・鈴木 款 (静岡大)・伊藤卓司 (三菱商事)
P-53	有孔虫 <i>Amphistegina</i> 属を用いたサンゴ礁海域の古水深の推定	○小林海央・藤田和彦 (琉球大・理工・物質地球科学)
P-54	パラオ諸島カヤンゲル環礁州島の堆積相と完新世における堆積プロセス	○安河内貫・茅根 創・大澤葉子 (東大・院理・地球惑星)
P-55	石垣島サンゴ礁の風上側および風下側の形成過程	○本郷宙軌・茅根 創 (東大学・院理・地球惑星)
P-56	パラオ共和国でのミドリイシ属サンゴ種苗生産の試み	○岩尾研二 (阿嘉島臨海研究所)・田村 實 (阿嘉島臨海研究所)・Irving Dwight (Palau International Coral Reef Center)・下池和幸 ((財) 自然環境研究センター)・大森 信 (阿嘉島臨海研究所)
P-57	サンゴ礁生態系への人為影響評価のための社会統計に基づく八重山地域の社会構造変遷解析	○松浦慎平・瀬岡和夫・熊谷 航・塚本栄子 (東京工業大・情報理工)
P-58	小型無人探査機によるサンゴ礁調査：新型観測プラットフォーム UROV/AUV の試験運航	○吉田 弘・石橋正二郎 ((独) 海洋研究開発機構 海洋工学センター)・山本啓之・古島靖夫 ((独) 海洋研究開発機構 極限環境生物圏研究センター)・百留忠洋 ((独) 海洋研究開発機構 海洋工学センター)・石川暁久 (日本海洋事業(株))・上村宇之 (広和株式会社)
P-59	日本における観賞用サンゴ類の流通と飼育の現状	○佐藤崇範・平良栄康 ((株) Aqua Culture Okinawa)
P-60	沖ノ鳥島のサンゴの種苗生産と増殖計画	○三上信雄・安藤 亘・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)
P-61	港湾整備におけるサンゴ群集との共生技術	竹田 哲・○前川 進・比嘉静秀・仲村進一・平山千尋 (沖縄総合事務局開発建設部港湾計画課)・長倉敏郎・池田義紀 (港湾空間高度化環境研究センター)・岩村俊平・山本秀一 ((株) エコー沿岸環境部)・高橋由浩 ((株) エコー沖繩事務所)
P-62	サンゴの船舶による長距離運搬技術の開発	○山本秀一・北野倫生 (エコー)・青田 徹 (不動テトラ)・安藤 亘・石岡 昇 (水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁漁港漁場整備部)
P-63	リーフ内筋目模様と数値計算による流動場との対応性の検討	瀬岡和夫、○竹本直人 (東京工業大学大学院情報理工学研究所情報環境学専攻)
P-64	裾礁型サンゴ礁におけるサンゴ幼生の初期分散過程に関する数値シミュレーション	瀬岡和夫・○有坂和真 (東京工業大・院情報理工)・田村 仁 ((独) 海洋研究開発機構 地球環境フロンティア研究センター)
P-65	琉球列島周辺の流動場解析および環境耐性を考慮した浮遊幼生輸送解析	○西本拓馬・瀬岡和夫・安田仁奈 (東京工業大・院情報理工)・鈴木庸虎 (JR 東日)・田村 仁・宮澤泰正 ((独) 海洋研究開発機構 地球フロンティア研究センター)
P-66	高緯度地域のサンゴ群集における高温耐性の共生藻 <i>Symbiodinium</i> 遺伝子型 D の存在	○Yi-Ting Lien (京都大・瀬戸臨海実)・中野義勝 (琉球大・瀬底実験所) 多様性中心)・Sakanan Plathong (タイ Prince of Songkla 大学) 多様性中心)・深見裕伸 (京都大・瀬戸臨海実)・Jih-Terng Wang (台湾 Tajen 科学技術学院)・Chaolun Allen Chen (台湾中央研究院生物多様性中心)
P-67	ミトコンドリア遺伝子による沖ノ鳥島と沖縄産のミドリイシ数種の比較	○深見裕伸 (京都大・瀬戸臨海実)・林原 毅 (水産総合研究センター・西海区水研)・三上信雄 ((社) 水産土木建設技術センター)・安藤 亘 ((社) 水産土木建設技術センター)・石岡 昇 ((社) 水産土木建設技術センター)・河野大輔 (水産庁・漁港漁場整備部)

It's Time to Fly! 特別企画 ネット座談会

～海外留学ってどうなのよ～

今回は、留学経験のある学会員の方に集まっていただき、留学全般についてざっくばらんに話を伺いました。それぞれの方に質問等をお持ちの方は、お気軽にお問い合わせ下さい！



▲左から、梅沢、渡邊、豊島

参加者 アイウエオ順 (1.現在の所属、2.留学先、3.留学資金、4.留学時期、5.E-mail)

- 安部真理子 (1.琉球大、2.ジェームズクック大学 (JCU) 海洋生物学部、3.ロータリー財団国際親善奨学金)、4.修士課程、5.shark@xc4.so-net.ne.jp)
- 豊島淳子 (1.環境省、2.ハワイ大学マノア校動物学部、3.ハワイ大学ティーチングアシスタントシブ、4.修士課程、5.JYUNKO_TOYOSHIMA@env.go.jp)
- 中谷誠治 (1.亜熱帯総研、2.JCU Dept. of Tropical Environment Studies and Geography、3.(財)国際開発センターの長期留学奨学金制度&相手先ラボの資金、4.博士課程& PD 研究員、5.nakaya@subtropics.or.jp)
- 深見裕伸 (1.京大瀬戸臨海、2.スミソニアン熱帯研究所、3.相手先ラボの資金、4.PD 研究員、5.hfukami@kais.kyoto-u.ac.jp)
- 渡邊剛 (1.北大、2.オーストラリア国立大学 (ANU) & フランス国立科学研究所 (CNRS)、3.学振 PD & 海外学振、4.PD 研究員、5.nabe@ep.sci.hokudai.ac.jp)

進行役

- 梅沢有 (1.地球研、2.ハワイ大学植物学科、3.学振 PD、4.PD 研究員、5.yu@chikyu.ac.jp)

梅：本日は、みなさんお集まり下さいまして、どうも有難うございます。最近、国外で研究する人が増えてきた反面、二の足を踏んでいる方も多いようですので、今日は、留学の動機、留学の長所・短所などを、ざっくばらんに伺いたいと思います。まず、留学先や、留学自体を決めた理由について教えていただけますか？

中：私は、修士を出た後の水産分野での現場経験から、勉強したいことがいっぱい出てきた時に、ちょうどよく、ODA 予算の資金を得られたのが大きかったですね。もともと、10年ぶりの学生生活をまじめに送る自信はなかったですが(笑)。

安：私も社会人経験後の留学でした。日本でのリーフチェック活動を進めていく上で本場での活動内容と「サンゴに関する基礎知識」を学ぶ必要があったのですが、やはり、奨学金を得られたのが大きなきっかけだったと思います。

深：語学は海外に行ってからでも十分できるようにするので、機会があったら、その機を逃さず、とりあえずやってみるという気軽な気持ちがいいと思いますよ。

梅：そうですね。僕も、研究上の動機というより資金があったから、行かなきゃ損損、っていう感じでした。ただ、コネのない中で留学先を探すのは大変で、多忙な相手からはメールの返事をもらうのも一苦労。効果があったのは、まずは、学生やPDから近づいて、彼らからも教官や事務の尻を叩いてもらうことです(笑)。皆さんも、留学前や留学中の苦労から学んだアドバイスはありますか？

豊：基本的にメール、〒、FAXなど、確実に届いているとは限らないので、必ず相手が受け取ったかどうかを電話などで確認して、手紙などに書く内容も、全てをはっきり分かりやすく書くといいですね。

あと、国際学会などで人脈を広げて、最初から留学先を絞らずに、たくさんの方に願書を出して選択肢を増やすのはいいと思いますよ。

渡：僕は、機関決定の段階での苦労はなかったですが、住居探しなどの生活面で、慣れるまでが大変でした。学振での留学は自由に研究を出来る反面、相手側のプロジェクト等に組み込まれていないので、こちらから積極的に働きかけないと深い付き合いができないということもありました。

安：私は住居は財団指定の学内の寮にすんなり決まったのですが、日本人の大学院生は殆どいない学科だったということもあり、慣れるまで大変でした。また、社会人を経験すると職場の上司から推薦状をもらわないといけなという事情があり、円満退職するにあたって難しい面もあります。

中：現地でも取れた予算が、当時GBRMPAととても険悪な関係にあり、実態が不明な、水中銃を携えたマッチョな遊漁者グループ (Spears) を対象にした研究で、彼らと打ち解けるために、一緒にサンゴ礁を潜り、魚を突き、サメに追いかけれ、連日バブでビールを飲み続け、気がつくとも2年経ってしまったことは、今ではいい思い出ですね。

梅：なかなか貴重な体験ですが、あまり一般学生の参考にはならないような(笑)。確かに僕も渡邊さんと同じ学振という自由な立場でしたが、距離を狭めるために、プロジェクトや学生の指導に深入りしていくハメになりました。授業のある学生や、相手先の資金で雇われていた深見さんのケースとは異なって、自由すぎると議論の機会も減って、英語の上達にも繋がらないと感じました。

安：私は学生として親身な指導を受け

たかったのですが、教官が忙しかったり、ラボのメンバーの多くが月一金の9時～5時という仕事体制だったり、結局、指導や技術の習得が思うようにならない面はありましたね。

深：うーん、確かにうちの研究所もカリブ海に位置していたので、ラテン系の人が多く、みなさん気さくでいつもお祭りのような感じでした。周りが働かないので、仕事の意欲は年々減っていったなあ(笑)。

梅：逆に、国外で学ぶことの良かった点は何でしょうか？

渡：国際的にも優秀な多くの研究者と一緒にいられることや、彼らが研究をして論文を書いていくプロセスを見ることができた点は良かったと思います。

豊：私がいた通称ココナッツアイランドと呼ばれているHIMB (Hawaiian Institute of Marine Biology) も居心地がよく、研究環境に恵まれていましたし、施設を訪れる世界中の著名な研究者の研究発表をセミナーなどで聞く機会が多くて良かったです。

安：授業がとても充実していました。とにかく毎日睡眠時間をカットして勉強しなければ追いつけないほどでした。ただ、サンゴの同定方法やサンゴ礁生態系、進化に関することなど基礎から広い知識が得られると同時に、論文の読み方や書き方もしっかり叩き込まれたのでこれらのスキルは現在でも役に立っています。

豊：ハワイは気候もよく、美味しい日本食も食べられて、適度に都会で娯楽も豊富なので、居心地が良すぎてつい予定より2年も長居してしまいました。(笑) 留学中はサンゴの勉強だけでなく、フラやウクレレなどの現地の文化も積極的に学びました。

深：パナマの食事はいいちだったなあ(笑)。

梅：海外留学は、技術を学ぶというよりむしろ、人的交流、文化交流という意味で、人生経験としてプラスになりますよね。

安：確かに、遺伝子解析技術など、日本の方が進んでいる分野もたくさんあると思います。

中：私の場合、ホンデラス、パラオ、オーストラリア、トンガと、社会に出てから10年以上も海外で過ごしていたという勘定でしょうか。さまざまな人種・文化・言語・自然などがあることが20歳代以来、あらゆることの当然の前提になっ

ています。ずっと日本にいたらどうなっていたか、うまく想像できません。

梅：僕の考えでは、大学学部生時代に休学して2年くらい国外の大学に通って学んで、修士からの研究機関の選択肢として入れておくのがよいと思うけど、みなさんはどう思いますか？

豊：私は学部時代にも一度留学しましたが、そのために修士からの留学はとてスムーズにいったと思います。英語力もまあまああったので、一度下見に行った時にインタビューを受けて、すぐにティーチングアシスタントの職を得ることができ、そういう意味では留学経験が役立ちました。

安：研究を効率よく進めるという意味では、自分のやり方を確立したPDとして海外に出るのが良いと思います。それ以前の基礎知識 (含：論文執筆等) をつけるという意味では、学部時代に国内の大学でその分野に関する学術用語や基礎を学び人脈を作っておき、修士課程から海外に出るのがちょうど良いかと思えます。学部から海外に出てしまうと今度は日本語での学術用語の習得に苦労するようです。

豊：人脈という意味では、日本で研究職に就きたいのであればやはり日本の大学院を出た方がよいと思う。でも、どうせ英語でも日本語でも新しい知識を学習する苦労は同じなので、最初から英語で学んでしまえば一度で済んで楽かも・・・。

梅：確かに、国外と違って、日本では年齢や人脈が就職の可否に大きく関係してきますね。結局、ケースバイケースで、どちらがいいかは一概には言えないですね。

渡：実際には日本と海外とはあまり違いがないこと、つまり多くのことは日本でも実現が可能であることを国外に出てはじめて体感できた、と言うのが本音かな。

深：日本人は他国の人には比べ圧倒的に勤勉であるので、研究だけならどの国に行っても大丈夫ですよ。

----- 今後、メンバーを入れ替えながら、テーマを絞った内容について、もう少し深く切り込んでいきますので、乞うご期待!-----

オーストラリアサンゴ礁学会 第82回大会

開催期間: 2006年8月18~20日

URL: <http://www.australiancoralreefsociety.org/>

参加報告



▲レセプション会場



▲口頭発表会場

畑 啓生 (京都大学 大学院 理学研究科 動物生態学教室)
e-mail: hata@d01.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

ケアンズの南、グレートバリアリーフを望む小さな町 Mission Beach にてオーストラリアサンゴ礁学会が開かれました。日本からは波利井佐紀さん (The University of Queensland) と、井口亮さん (James Cook University)、安田仁奈さん (東工大)、私の4名が参加しました。2日間、2つの会議室で基調講演4件を含むおよそ100題の発表がありました。オーストラリア各大学の院生が中心となり、サンゴと褐虫藻との共生や、温暖化によるサンゴの白化、それに追い打ちをかけるサンゴの病気、そのようなサンゴ礁をどのように管理・保護して行くのか、またサンゴ礁生物の幼生分散や、それによる個体群間の遺伝的交流、サンゴ礁の地史など重要なテーマにつき、盛んに研究発表や質疑応答がなされました。ポスター発表はリゾートホテルのレストラン兼カジノ・ゲームセンターが会場で (私はポスター発表だったのですが)、日本サンゴ礁学会のように盛

上がりませんでした。そんな中、安田さんは豊富なデータを言葉だけでなく豊かな表現力で口頭発表され、Student Prize を受賞されました (詳細は安田さんのコメント参照)。オーストラリアでの研究や、留学の可能性を探っていた安田さんと私には、学会に参加してオーストラリアの研究者と交流を深めることに加え、先人の波利井さんや井口さん、そして途中から参加の岡地賢さん (有限会社コーラルクエスト) の生の体験談がとてもおもしろく、夜が更けてゆきました。

大会の翌日、オーストラリアのサンゴ礁研究 Centre of Excellence 主催で Student Day が開催されました。学会を挙げて論文を書くことの重要性や、論文のアクセプトのさせ方 (「これから論文を書く若者のために」 酒井聡樹著と同様) を学生や院生に読ませ、論文を書かなければ、と決意を新たにしました。

安田 仁奈 (東京工業大学 大学院 情報理工学研究所 情報環境学専攻)
e-mail: yasuda@wv.mei.titech.ac.jp

本大会で Student Prize (口頭発表 受賞者計6名) をいただきました。発表タイトルは "Genetic structure of the crown-of-thorns starfish, *Acanthaster planci*, throughout the Ryukyu Islands and southern part of the Mainland of Japan" で、日本国内10地点とフィジー地点におけるオニヒトデ集団を、多型分子マーカーであるマイクロサテライトマーカーを用いて解析した結果を発表しました。日本の集団とフィジーの集団は統計学的に分化している一方、国内の集団間の遺伝的距離は小さく、海流による幼生分散による集団の混合が示唆されるデータが得られました。

受賞理由を書くのは非常におこがましいのですが、日本から単独ではるばるやってきてポスターも含め二題発表したことを、好意的に受け止めてくれたという事実は少なからず受賞理由に含まれていると思います。内容面としては、オーストラリアでも幼生分散を評価する手

法として、分子マーカーを用いた集団解析と数値シミュレーションを組み合わせた研究に対し非常に関心が高かったことが言えると思います。また、熱意だけは伝わった?らしく、発表自体の評判は比較的良かったです。

今回、参加して感じたことは、発表が上手な人が多いということ、若手を育てようという意識が高いということ、研究者同士の結束力が強そうであるということでした。「来年はもっとたくさん日本人を連れてきてね。」と言われたので、是非とも来年参加していただければ嬉しいです。最後に、オニヒトデのサンプリングに協力して下さった方々、本当にありがとうございました。

来年は8月頃、
西オーストラリアで
開催らしい?!

- 詳細未定

A u s t r a l i a n C o r a l R e e f S o c i e t y



国際サンゴ礁学会ヨーロッパ大会

参加報告

国立環境研究所, フランス開発研究所 山野 博哉

去る9月19日から22日にかけて、ドイツ、ブレーメンで、国際サンゴ礁学会ヨーロッパ大会が開かれた。本大会は、国際サンゴ礁シンポジウムの間を埋めるように、4年ごとに開かれている。今回のホストはドイツ・ブレーメン大学の熱帯生態系研究センター (ZMT) であった。



大会には、全部で36ヶ国から290名の参加登録があり、日本からは、私を含めて9名が参加した。4件のキーノートレクチャー、1件の一般向け公開講演と、口頭・ポスターあわせて254件の発表があった。研究対象地域は紅海・インド洋とカリブ海に集中していたものの、内容は地学・生物学・保全と多岐にわたりバランスが取れており、ヨーロッパでのサンゴ礁研究の幅広さを示したものであった。特に、ヨーロッパならではのものとして、冷水性・深海域性のサンゴのセッションとインド洋のセッションにそれぞれ半日以上がさかれ、前者では、北海や地中海のサンゴに関する発表、後者では津波によるサンゴ礁の変化に関する発表が数多く見られた。

会期中はサイドイベントも充実しており、セッション終了後の市内観光ツアーやレストランでの夕食の他、ブレーメン大に設置されているIODP (国際深海掘削計画) のコアセンターの見学があ

り、昨年タヒチで採取したコアを見学することができた。このコアの初期結果は、早速 Gilbert Camoin のキーノートレクチャーで発表されていた。

太平洋に関するものは日本やオーストラリアの研究者によるもの以外は少なく、発表を聞きながら何となくしっくり来なかったが、ヨーロッパのサンゴ礁研究の一端を見ることができたと思う。John Pandolfi, Gilbert Camoin, Peter Mumby, Anja Scheffers のキーノートレクチャーはいずれも興味深かったが、特に私の印象に残ったのは Peter Mumby と Anja Scheffers のものであった。Peter Mumby の講演は非常にすばらしく、衰退してしまっただけのカリブ海のサンゴ礁を対象に、生物侵食の度合いとサンゴ被度の二つの軸でサンゴ礁の現在の状態をとらえ、被度回復のために生物侵食をコントロールすることが必要であることをシミュレーションモデルと現場実験で定量的に示したもので、太平洋のサンゴ礁への

程度適用できるかが気になったが、考え方や方法は、今後の方向を明確に示すものであったと思う。一方、Anja Scheffers の講演は、津波や台風の堆積物が形成する地形に関するもので、これらの堆積物の重要性を強く示すものであったが、物理的な堆積プロセスや続成・化石化プロセスが検討されておらず、私としては少しもの足りず、自身への反省も含め、分野にとらわれないアプローチが不可欠であることを強く感じた。

また、今回のホストである ZMT でサンゴ礁の研究が盛んにされていることを知ったのも良かった点であった。やはり、こうした国際学会をホストする、というのは、研究内容をアピールするためにも必要であり、2004年の沖縄での国際サンゴ礁シンポジウムも効果的なものであったと期待したい。ZMT は、研究面ではイスラエルとのつながりが強いようだが、東南アジアのサンゴ礁のモニタリングや保全にも力を入れており、

今後日本との連携も期待されるかもしれない。

プログラムやアブストラクトなど本大会に関する詳細な情報、ZMT に関する情報は、以下のページを参照されたい。

本大会のページ
<http://www-user.zfn.uni-bremen.de/~isrs2006/index.html>
ZMT のウェブページ
<http://www.zmt-bremen.de/>

なお、売れ残った本大会の T シャツとマグカップが値引き販売されているので、ご希望の方は以下のページからどうぞ (私は初日に定価で買ってしまいました)。

<http://isrs2006.blogspot.com/>

写真提供: Georg Heiss

I n t e r n a t i o n a l S o c i e t y f o r R e e f S t u d i e s

連載 1

若手会員の



A young member's eye

財) 海洋博覧会記念公園管理財団
山本 広美
h_yamamoto@kaiyohaku.or.jp



▲サンゴ水槽の上で、
左から野中、甲斐、山本、柿崎

初めまして、こんにちは。
(財) 海洋博覧会記念公園管理財団・魚類課の山本広美です。
という、どこ施設だ?と思われ方も多いのでは...はい、そうです。沖縄美ら海水族館の職員は「財団職員」なんです。

美ら海水族館でお仕事するようになって、はや5年が経ちました。皆さんご存じかと思いますが、私のサンゴ飼育の先輩は野中正法さん。大学の先輩でもあります。野中さんが「サンゴ調査のアルバイトを探してるの〜」と、声をかけてくれたのが、私の水族館人生の始まりでした。

いっしょに野外調査やサンゴ水槽の様子を見ていたのは遠い過去となり、今や野中さんは「深海OCT派」の人となってしまいました。「八放サンゴの方が美しい」のだとか。八放も六放も分類できてしまう、偉大な上司です。

水族館は、海への扉。海のことはあんまり...という方、海が好きでたまらない方、大人から子供までいるんなかたに海の神秘を知っていただく大きなゲートです。いつも新たな発見を!わくわくを!提供したいので、お客様といっしょに水槽を眺めながら、その声に耳を澄ませることもしばしば。

お客様:「あ、これ、サメと思ってたけど、マグロの仲間なんだ。ツ・マグロだって」
うう。ツ・マグロ、なのか??

解説員:「サンゴは初夏に卵を産むものが多く、受精するとプラナラというようせいに...」

お客様:「えー、かわいい!羽が生えてるの?飛ぶの?」

幼生?妖精? 変換間違い...。
と、どちらかという、わたしたちの方が、お客様から新鮮な驚きをもたらしているのかも。そうですよね、聞き慣れない言葉、知らない概念、最初はそうなっちゃいます。

私も人文系の施設に行く、そこの方たちにとっ

ては“??”なことを、観覧しながらしゃべっているのかもしれませんが。気をつけよう。そして、自分にとってアタリマエと思っていたことを、常に新鮮な、初心者の目で見るとを忘れないようにしよう、と氣を引き締めて。

“サンゴの海”水槽の前では、1日3回、サンゴは動物でイソギンチャクやクラゲの仲間なこと、卵を産むものが多いこと、サンゴはサンゴ礁生態系の土台であること...などを解説で紹介しています。そのとき、サンゴ=桃色と思っている方が多く、「これがサンゴ?色がキタナイわねえ。」という声!!「この茶色は、光合成をしている植物プランクトンの色ですよ。」「ピンク色のは深海のサンゴですよ。」と説明すると、わかってくれる方が多くてホッとします。

私の仕事内容は、サンゴの飼育展示・サンゴの野外モニタリング・飼育サンゴの研究がしたい1:1:1くらいの比率です。サンゴの飼育といっても、水族館の前に生育する種を、その海水で育てているので、面倒を見ている、というより、場所を提供して“サンゴ様に育てて頂いている”という方が近いかもかもしれません。サンゴ放任主義の飼育係です。

そんな私にも後輩ができました。柿崎くんです。来年、日本サンゴ礁学会デビューを目指して彼にがんばってもらおう。琉球大学の酒井研の甲斐清香さんにも、サンゴ飼育管理のお手伝いしてもらっています。サンゴをいっしょに見ていく仲間が増えて、本当によかった。

サンゴたちとともに、沖縄で皆様をお待ちします。沖縄美ら海水族館へのご意見・ご質問もどしどしお寄せください。

連載 2

サンゴ礁関連施設



京都大学フィールド科学教育研究センター
瀬戸臨海実験所

深見 裕伸 (助手)
hfukami@kais.kyoto-u.ac.jp



▲瀬戸臨海実験所の全景

ここ瀬戸臨海実験所は、京都大学理学部の附属施設として、大正11年に設立されました。さらに、昭和4年に昭和天皇が御来訪されたのを記念して、昭和5年に当時の水槽室を一般に公開するようになり、それが現在の附属水族館の始まりです。水族館には無脊椎動物を中心に600種以上が展示されており、一般に公開(有料)するだけでなく、実験動物の飼育など研究施設としての役割も果たしています。また、無脊椎動物関連ではかなりの蔵書を所蔵している附属図書館もあります。

実験所は、紀伊半島西岸、紀伊水道から太平洋に出るあたりの田辺湾口に位置しており、関西の有

名な観光地の一つである白浜町にあります。そのため、夏季は、水族館に訪れる人、実習に来る大学生や高校生、個人研究者が集まり、研究所もその周囲も人であふれかえり、もっとも忙しい季節となります。

この実験所では、長年にわたり無脊椎動物の系統分類・生態学などの研究が行われており、数多くの研究者を輩出しています。2003年に理学部からフィールド科学教育研究センターに移行するに伴い、森・川・海の相互関連についての研究も現在進めているところです。所員は白山所長他4名の教員がメイオイベントス、甲殻類、刺胞動物などを扱った研究をしています。また、他にも水族館の技術職員や事務職員など11名のスタッフが働いており大所帯となっています。

サンゴについて話をすると、白浜一田辺周辺は黒潮の支流が入ってくるため、所々に造礁サンゴの群集が見られます。特に、和歌山県において、このあたりは造礁サンゴの北限に位置し、ここより北(大阪方面)では、ほとんど造礁サンゴが見られなくなります。ちなみに、テーブル状サンゴ(クシハダミドリイシやエンタクミドリイシ)の大群落が見られる日本での北限でもあります。種類も約70種が知られており、主に見られるのはミドリイシ属サンゴ(5種)とキクメイシ類(約40種)になります。また、白浜から車で1時間30分ほど南下すると串本町があり、その海域では造礁サンゴ120種ほどが報告されています。

私は、1年半前にここに赴任してきたばかりで、まだここでの造礁サンゴの研究は始まったばかりで

すが、いろいろと興味深いことも分かってきました。温帯域のほとんどのサンゴは、黒潮による沖縄周辺からの移入であると考えられているため、多少形態が異なっても沖縄周辺で見られる種として扱うことがあります。しかし、昨年に行っている交配実験や分子解析の結果は、実はこれまで考えられている以上に温帯域特異種が多い可能性を強く示唆しています。

現在、この研究所でサンゴを研究しているのは、私と院生一人だけです。色々としてみたい事は次から次へと出てくるのに、人も時間も無いというのが現状です。温帯域のサンゴはまだ未知の部分が多く、研究テーマの宝庫です。また、温暖化の影響を見るのにも面白いフィールドでしょう。もし、温帯域のサンゴも面白いと思ったら一度研究室を訪ねてみてください。



▲実験所周辺で見られる水中景観

〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459
Tel: 0739-42-3515 Fax: 0739-42-4518
http://www.seto.kais.kyoto-u.ac.jp

編集後記 Edit postscript

サンゴ礁から離れて仕事をする機会が多くなりました(泣)。

9回大会の盛況、指をくわえて眺めています。

編集担当 梅澤



日本サンゴ礁学会ニュースレター [2006/2007 No.2]
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.31

2006年10月25日発行

●編集・発行人/「日本サンゴ礁学会広報委員会」
日比野浩平・安部真理子・木村匡・杉原薫・野崎健・藤村弘行・梅澤有・鈴木倫太郎・中井達郎・波利井佐紀・山野博哉・渡邊敦
●発行所/日本サンゴ礁学会 ●事務局/茅根 創 <kayanne@eps.s.u.-tokyo.ac.jp>
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358